

ベルギーの言語と文化

法学部
平尾 節子

ベルギーの魅力は何であろうか？

ベルギーは、華麗な中世文化の息吹きを伝える国である。その美しく、平和で、活気に満ちたベルギーの都市や田園のたたずまいの背後には、苦難の歴史がある。「ベルギーの人々には、苦難に耐えた勇気と、未来に挑戦する強い意志や、英知が秘められている」、「ベルギーの首都、ブルッセルは、‘Center of Europe’ (ヨーロッパの中心) である」と、日本ベルギー大使館、French Community の大使代理の Jean-François Delahaut 氏は誇らしげに語った。また、Flemish Community の David Maenhout 氏は「ベルギーは、ドイツ、フランス、オランダと国境を接し、ドーバー海峡でイギリスと通じている。ヨーロッパの Crossing Road (交差点) であり、ヨーロッパの Heart (心臓) である」と、言われた。

ヨーロッパの中心、ヨーロッパの心臓であると称せられるベルギー・ブルッセルには、ヨーロッパ連合 (EU) 本部がある。

筆者は、2000年3月、SIETAR (Society of Intercultural Education, Training, and Research) 学会世界大会で、研究発表を行った際に、EU 本部を訪問し、EU の言語教育について調査・研究をする機会を得た。その一端を「Goken News No. 5: EU の語学教育—ヨーロッパ言語年 2001—」で紹介した。今回は、ベルギーの魅力をかぐってみよう。

ベルギーの概要

国名：ベルギー王国 Kingdom of Belgium

面積：30,519km² (九州よりやや小さい)

人口：1,016万人

首都：ブルッセル

民族：フラマン人 (北部、オランダ語系) 55%

ワロン人 (南部、フランス語系) 44%

言語：公用語は北部でオランダ語、南部でフランス語、0.6%がドイツ語

宗教：キリスト教 (カトリック90%)

政体：立憲君主制 (連邦制)

元首：アルベール 2 世国王

独立：1831年7月21日

EU 議長国：1993年

ベルギーの歴史

ベルギーはローマ帝国時代、フランク王国時代、中世の封建時代を通じ、世界的な交易上の拠点として古くから文明の開けた地方であった。特に、11世紀以降は東方交易が盛んになり、北イタリアなどとともルネッサンスの文化および産業貿易の勃興の中心の一つとなった。しかし、15世紀以降はフランス、オーストリア、スペインなどの周辺の強国の支配を受け、苦難の時代を送る。オランダ統治下の1830年、ブルッセルでの反乱を機に暫定政府が樹立され、翌1831年、立憲君主国となる。1839年、永世中立国となるが、第1次世界大戦後却下する。民主的な立憲君主国で、実際の行政権は内閣に委ねられている。

第2次世界大戦後、ブリュッセルはヨーロッパ統合の中核としての国際的役割を担うようになった。ヨーロッパ連合 (EU) 本部、ヨーロッパ議会、ヨーロッパ委員会、北大西洋条約機構 (NATO) 本部などの国際機関の本部が設置され、国際ビジネスのヨーロッパにおける中心地となる。GNP は自由主義世界でも豊かな国の一つで、EU 平均を常に上回っている。

ベルギーの言語

ベルギーは、多言語国家である。「スリにご用心」の注意書にも、上から、オランダ語、フランス語、ドイツ語、英語で、記されている。

ベルギーの国情の最大の特徴は、フラマン人(オランダ語を話す)と、ワロン人(フランス語を話す)の2言語国民、およびドイツ語系の国民で構成されている点にある。北部に多いオランダ語を話すフラマン人は、ゲルマン的特性から、質実剛健、忍耐強い。南部に多いフランス語を話すワロン人は、ラテン的特性で独立心が強く、楽天的であるとされる。

ベルギーの公用語は、オランダ語とフランス語の2言語である。ブルッセル首都圏では、80%がフランス語、20%がオランダ語を話す。国民の11%が両方を使用でき、大多数が英語を駆使する。

ベルギーの語学教育

ベルギーは、フラマン語(オランダ語系)圏と、フランス語圏およびドイツ語圏とに分かれている連邦制国家である。教育制度は、フラマン語圏とフランス語圏・ドイツ語圏と異なっている。フランス語圏とドイツ語圏の教育制度はほぼ同じである。教育行政も、フラマン語圏教育省と、フランス語圏教育省と分れている。

2001年3月、筆者は、両教育省を訪問し、各々の小・中・高・大学、計8校を訪れる機会を得た。EUの言語政策である「1+2」すなわち「母語プラス外国語2ヶ国語」の言語教育が実施されている実態を参観することができた。つまり、小学校第3学年から、母語であるオランダ語(フランス語、またはドイツ語)を習得するとともに、第2言語(フランダース地方では、フランス語、ワロン地方では、オランダ語、ドイツ地方では、フランス語)を選択する。さらに、小学校第5学年から、外国語としての英語を学習している。

1425年、世界最古のカトリック大学として創設されたルーヴェン・カトリック大学の英語教育学では、target languageである英語を用いて、講義、プレゼンテーション、ディスカッションが展開さ



グランド・プラス広場〔王の家〕Maison du Roiの前にて

れていた。

ベルギーの文化

ベルギーには、ゲルマンとラテンの文化がたくみに調和していると言われる。

首都ブルッセルのグランド・プラスは、ヴィクトル・ユゴーが、「世界で最も美しい広場」と賞賛した広場である。広場正面には、市庁舎(左)、ギルド・ハウス(中央)、王の家(右)などの歴史的建造物があり、その華麗さ、荘厳さに魅了されてしまう。

市庁舎(14C)の塔は、ベルギー特産の手編みレースを連想させるような繊細で緻密なゴシック装飾でおおわれている。ギルド・ハウス(17~18C)の壁面には、金箔が燦然と輝き、ベルギー独特のバロック的絢爛・豪華な装飾である。ベルギー建築の感性は、タピスリー織りや、ダイヤモンドのペ

ルギー・カットと無縁ではないかもしれないと思われた。

1880年のベルギー建国50周年を記念するサン・カントネール宮殿入り口にある凱旋門を夕刻に訪れたが、緑色にライトアップされて、息をのむ美しさであった。

グランド・プラスの北東の丘の上には、13C建立のサン・ミッシェル大聖堂がある。昨年、ベルギー王室のフィリップ皇太子の結婚式が行われ、皇太子と雅子妃も出席された。大聖堂の内部には、前国王の結婚式当時の現天皇・皇后列席の写真の拡大パネルが、飾られていた。

京都・祇園祭の鶏鉾の重要文化財になっているゴブラン織りのタピスリーは、トロイの王子、ヘクトルが妻子に別れを告げる場面が織られているが、16Cにベルギーで製作されたものであるという。

「フランダースの犬」のいわれなど、ベルギーと日本との友好関係が色濃く感じられた。

ベルギーの言語教育に関する調査・研究で、レクチャーをして下さった French Community 教育省の Dr. André Bayen は、ベルギーの色とりどりのチョコレートは「食べる宝石」であるとか、ベルギー・ビールの個人消費量は、世界一で、種類も800種類に及ぶなど、ユーモアを交えた説明もして下さった。学校訪問スケジュールやレクチャーの手配をして下さった Flemish Community 教育省の Mr. Gaby Hostens が、東京で開催された G8 教育大臣会議「G8 教育サミット」に出席されたと聞いて、感動、感激が連続したベルギー訪問であった。

『映画「アモーレス・ペロス」 が描くメキシコシティ』

経営学部
丸谷雄一郎

「アモーレス・ペロス」は2000年のカンヌ映画祭批評家週間グランプリを獲得し、東京国際映画祭でもグランプリを受賞した。監督は新人のアレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥであり、ラジオ局の人気DJからCM監督を経て初メガホンとなった。

映画は導入部分と3つのエピソードの4部構成である。導入部分は3つのエピソードを結びつける役割をしており、3つのエピソードの主人公達が登場するカーチェースシーンとなっている。若者と血まみれの犬をのせた車は追跡されており、追跡車を振り切ったかに見えたその瞬間に別の車に接触し、事故を起こす。

事故に関わる3つのエピソードが以下では描かれる。エピソード1はこの事故の加害者であるオクタビオと義理の姉スサナの物語である。スサナは兄と望まぬ妊娠の結果結婚し、たびたび暴力を振るわれている。オクタビオは義姉スサナを愛しているのだから、兄の仕打ちに耐え切れず、姉に駆け落ちを持ちかけ、その資金調達のために、兄の犬を使って闘犬で荒稼ぎをする。オクタビオとスサナは結ばれ、駆け落ちを決めるが、結局、犬は闘犬中に銃で撃たれ、スサナは兄のもとへ戻る。オクタビオは犬を撃ち殺した相手をナイフで刺し、彼らの仲間に追跡され、導入部分のカーチェースの部分へと結びつく。

エピソード2は事故の被害者であるスーパーモデルのパレリアの物語である。彼女はこの事故まで仕事も恋も順調であった。仕事は一流ブランドとの契約を獲得し、不倫相手の広告デザイナー、